

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 3 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22520497

研究課題名(和文)主観的事態把握の記号化に関する多言語対照研究

研究課題名(英文)A Study of Subjective Construal of Events in English, Japanese and other Languages

研究代表者

早瀬 尚子 (HAYASE, Naoko)

大阪大学・言語文化研究科(研究院)・准教授

研究者番号：00263179

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円、(間接経費) 780,000円

研究成果の概要(和文)：付帯状況を表す表現の中でも、主語が主節と付帯状況節とで不一致となる英語の「懸垂分詞構文」の成立条件として「事態描写の報告者である話者の行為を表す際に用いられる」ことを明らかにした。またそこから転じて、懸垂分詞節が事態や議論の流れを司るメタ的な使われ方へと個々の表現毎に発展、意味変化を見せていることを明らかにした。またフランス語や日本語との比較を通じ、元となる表現が当該言語で異端で有標であること、このメタ的用法の発展が見られることとの間に、相関性が見られることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The project has explicated that (1) the motivation for the use of dangling participial construction is that it describes the sequence of two situations from a conceptualizer's perspective: "When [the conceptualizer] doing the event in a participle, [the conceptualizer realizes] the situation in the main clause." (2) some dangling participles further develop metalinguistic, interpersonal or intersubjective function: *_considering_* as a hedge, *_moving on_* and *_speaking of which_* as a topic changing function, and *_supposing_* as casting question to the hearer. (3) the comparison between English, French and Japanese suggests that the development of metalinguistic, interpersonal use of dangling participles tend to be observed more often when the dangling participles in the language has a marked status.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：構文化 主観化・主体化

1. 研究開始当初の背景

申請者は過去に付帯状況表現としての分詞構文の調査を行った(早瀬 1993, 1997, 2002)。時間的關係を表す分詞構文では、主にアスペクトに注目して2つの事態を比較し、1)主節に Figure と目される事態が配置される原則があり、2)概念的上下関係や因果關係を表す分詞構文では原因となるものを Ground (分詞) で表すのが無標形式であることを、それぞれ確認した。

しかしそれまでの研究では、発話者が客観的な観察者として機能するケースのみに検討対象を限っており、発話者の役割を積極的にとりこむ視点に欠けていた。この「発話者」という存在を明確に位置づけることで、「懸垂分詞構文」という、主語が不一致のため破格であるはずの表現が英語で受け入れられていることが確認されている。

特にこの構文が表す「発見のシナリオ」は日本語でも「発見の<と>」として頻発する(豊田 1982, 坪本 1998)。また英語でも when 節などの独立文や、談話レベルでは "represented perception" と呼ばれる現象など、これに当てはまるケースがあり、言語を超えて日常的によく生じる自然な認知パターンの一つと考えられる。つまり、「発見のシナリオ」で2つの事態を結ぶ時、談話認知レベルでは自然でも、それを文レベルに適用できるか否かは、言語により異なると考えられる。

2. 研究の目的

2つの事態を結び表現する際、「発見のシナリオ」のような、発話者が事態描写に深く関与する捉え方のケースまでを言語が許容するかどうか、言語により制約が見られるか否かについて調査検討する。主観的捉え方、経験的・認知的動機付けのある事態連鎖把握パターンが関与すると目される構文を複数検討し、対応する日本語表現との比較を出発点として、英語と日本語以外の言語での類似表現の比較へと進め、最終的には多言語的な比較や翻訳論・類型論的提言へと発展させることが目標である。

3. 研究の方法

BNC や COCA、SOAP コーパスおよび日本語では KOTONOHA コーパスを用いて事例を収集する。その中で現れてくる特徴を洗い出し、その表現の使用条件を特定する。また、特に話しことばの対話場面で用いられている事例に着目し、特定の意味機能の発現を確認していった。

さらには、ネイティブのインフォーマントに対する作例のチェックなども行うことで、仮説の妥当性を確認していった。

また、多言語比較の第一歩としてフランス語研究者との連携を行い、類似の表現の傾向についてのデータ収集および分析も行った。

4. 研究成果

懸垂分詞節が、英語では破格であるにもかかわらず用いられる条件として、事態把握をする話者の知覚行為を表していること、が挙げられたが、そのことが更なる懸垂分詞節の意味変化を促進していることが明らかになった。

特に、談話の流れや話題転換などを司るメタ言語的な指令機能を持った表現へと個々に変化をさせていることが英語でも (Moving on, Considering, Speaking of which, Supposing ~ ? など) また日本語でも確認できた(考えてみると、言ってみると)。

さらには筑波大学の渡邊淳也氏との連携により、フランス語との比較も行うことができた。その結果、もとなる懸垂分詞構文相当表現が、当該言語で有標と目されることと、対人關係的、メタ言語的な表現が発展しやすいこととの間に相関性がある可能性を提示することができた。

以上の研究成果について、招待発表、招待講演、学会発表、論文執筆公表と、以下に記述する形で公表した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 4件)

早瀬尚子(2011)「分詞派生前置詞、接続詞の発展と(間)主観性—considering と moving on を例に」『言語文化研究科プロジェクト「言語における時空をめぐる IX」』51-60.

早瀬尚子(2011)「懸垂分詞構文の意味とその意味変化に伴う(間)主観性」『第 83 回大会日本英文学会 Proceedings』133-135.

早瀬尚子(2012)「懸垂分詞構文から Langacker の視点構図に言えること」『時空と認知の言語学』(大阪大学大学院言語文化研究科 特別プロジェクト)』39-48.

早瀬尚子(2013)「日本語の「懸垂分詞」的接続表現について:「考えてみると」を例に」『時空と認知の言語学 II』39-48.(大阪大学大学院言語文化研究科 特別プロジェクト)

[学会発表](計 14件)

早瀬尚子(2010)「構文の意味と視点 意味の定式化はどこまで可能か」日本英文学会関西支部大会シンポジウム司会・講師(大阪市立大学: 2010.12.18)

早瀬尚子(2011)「懸垂分詞構文の意味とその意味変化に伴う(間)主観性」日本英文学会全国大会シンポジウム司会・講師(北九州大学: 2011.5.23)

Naoko HAYASE (2011) "The Motivation for the

English Dangling Participle Construction,” International Cognitive Linguistic Conference (国際認知言語学会)(中華人民共和国:西安外国語大学:2011.7.13)

Naoko HAYASE (2011) “The Synchronic and Diachronic View on the Motivation for the Use of English Dangling Participles” International Conference on Historical Linguistics (国際歴史言語学会)(日本:民族学博物館:2011.7.28)

早瀬尚子(2012)「懸垂分詞に見る(間)主観性の現れ方」言語と(間)主観性研究フォーラム in 仙台「ラネカーの視点構図と(間)主観性」(招待発表 東北大学:2012.3.25)

Naoko HAYASE (2012) “Constructionalization and (Inter)subjectivity of Dangling Participial Construction” International Conference on Construction Grammar (国際構文論学会)(韓国:韓国外国語大学:2012.8.11)

早瀬尚子(2012)「懸垂分詞から対人関係機能へ—懸垂分詞句の構文化」ワークショップ<構文の意味をめぐって>招待講演(神戸市外国語大学:2012.10.6)

早瀬尚子(2012)「懸垂分詞句の間主観性と構文化」福岡言語学会(招待発表)(九州大学:2012.12.8)

早瀬尚子(2013)「懸垂分詞構文から対人関係機能へ—懸垂分詞句の構文化現象を考える—」和光大学言語学講演会(招待講演:2013.1.12)

早瀬尚子(2013)「英語の懸垂分詞構文にみる事態のとらえ方—日本語との対照研究」岡山大学プロジェクト研究『ことばと外界認知—日本語(方言)・英語・フランス語の構文からみえてくるもの—』(招待講演)(岡山大学文学部:2013.3.18)

早瀬尚子(2013)(学会発表)“The Synchronic and Diachronic View on the Motivation for the use of Suspended Dangling Participles in English and Japanese” International Cognitive Linguistics Conference 12(第12回国際認知言語学会)(於:カナダ・アルバータ大学 2013.6.28)(査読有)

早瀬尚子(2013)(招待講演)「懸垂分詞構文から見える日英比較分析—事態認知・事態報告と視点とジャンル」日本英文学会北海道支部第58回大会特別講演(於:北海道大学 2013.10.6)

早瀬尚子(2013)(招待発表)「懸垂分詞節の構文化現象と日英対照」ワークショップ『構文の意味と拡がり』(於:和光大学 2013.10.12)

早瀬尚子・渡邊淳也(2013)(研究発表)「英語の懸垂分詞構文とフランス語の主語不一致ジェロントイフの対照研究」関西フランス語研究会(於:

関西大学 2013.12.14)(査読無)

〔図書〕(計 5 件)

Naoko HAYASE (2011) “The cognitive motivation for the use of dangling participles in English” Klaus-Uwe Panther and Gunter Radden (eds.) *Motivation in Grammar and the Lexicon*, 89-105.

早瀬尚子(2012)「英語の懸垂分詞構文とその意味変化」畠山雄二(編著)『日英語の構文研究から探る理論言語学の可能性』開拓社 57-69.

早瀬尚子(2013:畠山雄二編:50項目中10項目分担執筆)『書評から見る理論言語学の可能性(上)』開拓社。

早瀬尚子(2013:畠山雄二編:50項目中10項目分担執筆)『書評から見る理論言語学の可能性(下)』開拓社。

Naoko HAYASE(2014 夏予定)“The Motivation for Using English Suspended Dangling Participles: A Usage-Based Development of (Inter)subjectivity,” Evie Coussé and Ferdinand von Mengden (eds.) *Usage-Based Approaches to Language Change, a series of Studies in functional and structural linguistics*, John Benjamins. (査読有)

早瀬尚子(近刊)(著書:分担執筆論文)「懸垂分詞構文から見た(inter)subjectivityと(inter)-subjectification」中村芳久・上原聡(共編著)『言語と主観性(仮)』開拓社。

〔産業財産権〕
出願状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

早瀬尚子(大阪大学大学院言語文化研究
科/准教授)

研究者番号: 00263179

(2)研究分担者

()

研究者番号:

(3)連携研究者

渡邊淳也(筑波大学人文社会科学研究科
(系)/准教授)

研究者番号: 20349210